Re:青コートの悪魔が始める異世界生活

ダンテ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンテに敗れ魔界に身を投じたバージル。

不幸にも魔界には復活しつつある魔帝がいた。

魔帝に挑むも力及ばず殺され、ネロアンジェロとして改造された。

改造された彼は数年後ダンテと再会する。

ダンテに倒され魂を解放された彼はあの世に逝き地獄に落とされるものかと思っていたが気がつくと見知らぬ世界にいた。

一人の少年と一緒に

一応言っておきますが私はデビルメイクライはある程度知っていますがリゼロについてはアニメをさらっと見た程度です。

故にあれ？と思った部分やここ違う！と思った部分があったらご指摘お願い致します。

目次

第1話　地獄に行くかと思えば　1
第2話　悪魔と始める徽章探し　4
第3話　青コートの悪魔ｖｓ腸狩りのエルザ　7
第4話　ロズワール邸にて　10
第5話　ロズワール邸にてその2　15
第6話　鬼ｖｓ悪魔　19
第7話　バージル、王都へ行く　25
第8話　集まりしデビルハンター　32

第1話　地獄に行くかと思えば

ここはどこだ。
まず彼から出た言葉はそれだけだった。
「俺は確かやつに……」
それもそのはずだ。彼は弟のダンテに倒されたはずなのに、死んだはずなのに生きている。おまけに見知らぬ土地だ。さすがのバージルも困惑していた。
彼の手には彼の愛刀閻魔刀が。そして彼が自分の手で倒し、手に入れた魔具ベオウルフが。
このまま突っ立っていては仕方がない。まずは周囲の様子を把握しようと彼は辺りを見回した。
「つまりこれはひょっとして…異世界召喚ってやつー!?」
「なんだと?」
異世界召喚という言葉に彼は振り向く。彼は声の正体を知るべく声がした場所に近づいた。たどり着くとそこには他の人々と比べて異様な格好をしていた。
全身ジャージというこの世界には存在しない衣類を着ていたのだ。
「おい貴様。いま異世界召喚といったな」
「えっ?ああ確かに言ったけどまさかあんたも?」
「ああどうやら俺も貴様と同じように異世界召喚されてしまったようだ」
この少年ナツキスバルは自分と同じ境遇の人と遭遇して少し安堵したようだ。バージルはどのように異世界召喚されたのか聞くべく二人だけの状況になるため裏路地に入っていった。
「いやーまさか同じく異世界召喚される人がいるとは思ってもいなかったよ。ああそうだ俺の名前はナツキスバル。あんたの名前は?」
随分馴れ馴れしい奴だなとは思いながらも
「バージルだ」
と答えた。
「バージルさんは何で異世界に召喚されたんすか?」

「知っていたら貴様に近づいてはいない。貴様こそ何か知っていることはないのか？」
　スバルは辛辣だなとは思いつつも同じ境遇の人だ別れるのも寂しいと思い
「いやー自分もわからないんすよねー何で自分がこうなったのか」
　あまり期待してはいなかったがそうかと答えこの街の情報を集めようと腰を上げると
「よおそこの二人組ィ。有り金全部置いてけや！」
　とチンピラの３人組がやってきた。
　すると少年ナツキスバルが
「バージルさん任せてくださいよ。今から俺があいつらを華麗に倒して見せますから！」
　ほうと彼が関心を持った。バージルが相手ならば取るに足らぬ相手だが３人相手に華麗に倒すと啖呵を切ったのだ。何か彼に倒す算段があるのかとバージルは様子を見るために腰を下ろした。
　スバルは勢いよく大柄の男にパンチを繰り出した。大柄の男はまともにそのパンチを受け勢いよく吹き飛び倒れた。
　そして仲間の一人がやられた事に動揺しているチンピラの一人に蹴りを放った。そのチンピラも吹き飛び倒れた。残るはあと一人だけ。彼は最後の一人を倒すべく近づいていったが男がナイフを出した瞬間スバルは恥も外聞も捨てて
　全力で土下座した。
　復活したチンピラが彼に殴り始めた。俗に言う集団リンチというやつだろう。
「Ｆｏｏｌｉｓｈｎｅｓｓ」（愚かな……）
　バージルはそう呟き
「もうその辺にしておけそれ以上やれば死ぬぞ」
（俺も丸くなったものだな……）
　とバージルは心の中で呟き
「ああん!?なにスカしてんだてめぇもーー」
「Ｓｃｕｍｂａｇ」（クズが）

瞬間バージルは大柄のチンピラの前に近づき鳩尾に重い（バージルは手加減していたが）一撃を食らわせた。チンピラの仲間が倒れるのを気づく前にもう一人の小柄のチンピラに蹴りを食らわせた。チンピラは勢いよく吹き飛んだ当分起きることはないだろう。そして最後のチンピラは
「てめぇこれ以上近づくと俺のナイフでーー」
「今何か言ったか？」
一瞬でバージルは背後に回り首に手刀を食らわせた。
「つ、強え……」
バージルは数秒でチンピラ3人を倒したしかも手加減しているように見えた。
「何だあの青コートの兄ちゃん強すぎだろ」
と金髪の少女フェルトは隠れながら見ていた。スバルは気づいていなかったがバージルはとっくに気づいていた。が特に危害は加えて来なかったので無視をしていた。
「あいつらとは関わらないようにしよう……」
とフェルトはその場を去った。
「おい大丈夫か？」
「ははは、すんません俺が倒すとか啖呵切っといてボコボコにされるってカッコ悪いすよね」
「ああ確かにカッコ悪かったなもっと力をつけろ力がなければなにも守れはしない」

「自分の身さえもな」
一瞬バージルさんの目が暗くなった気がした。過去に何かあったのだろうか。そう思案していると
「ーーそこまでよ、悪党」
一人の少女が現れた。

第2話　悪魔と始める徽章探し

「ーーそこまでよ、悪党」
　突如現れた可憐な少女はバージルたちにそう言い放った。
「それ以上の狼藉は見過ごせな…い？」
　何故疑問形で喋ったのかというとそこにはチンピラ3人を一人で倒した青コートの男がいたからである。
「まさかあなたが彼らをいじめてたの？」
「違う。むしろ向こうから絡んできたんだ」
「多分嘘は言ってないと思うよー」
　突然猫のような生物が出てきた。
「やべえあいつ精霊使いだ！しかもそれ以上にもっとやべえ奴がいるから逃げるぞ！」チンピラ共はそそくさと逃げていった。
　スバルは安心しきって眠りに落ちてしまった。その後スバルはその少女によって治癒されていた。
　バージルはただ待つのも退屈なので彼女から盗まれた物についてを聞き出そうとした。
「貴様さっき盗まれた物を返せといっていたなそんなに大事なのか？」
「そうよ忘れてたわ！あなた私の徽章をかえして！」
「忘れちゃダメだよー」
「だからその徽章とやらを盗んだのは俺ではない金髪のガキだ」
「えっホントに!?わたしホントに道草食ってただけ!?」
「そいつは放っておいて貴様はいったらどうだ？大切な物なのだろう？」
「バージルさんひどくないっすかそれ!?」
　とスバルはつっこんだ。
「フンッもうとっくにくたばっていると思ったぞ」
「なぁ！その徽章探し俺たちで手伝うよ！」
「……俺たちだと？」
　とバージルは疑問を投げかけた。

「いいじゃないすか～もしそれを俺たちが手伝ったら街の地形を覚えられる。今何が起きてるか分かる。良いことだらけだと思うんですけどねぇ～」
　そういうとバージルは
「……フンッ」
　と鼻で答えた否定してこない限り渋々受け入れたといいうことだろう。
　よーしじゃあ徽章探し始めますか！バージルさん！えーと…」
「……サテラよ」
「そうかサテラか！よしじゃあ始めますか！」
　そして徽章探しが始まった。
　そして彼らは聞き込みを始めた。街の人曰く物を盗むような奴らは大体貧民街に住んでいるとの事。それを聞きさっそく一行は貧民街に入った。
「そういえばバージルさんってどこからきたんすか？」
　とスバルが聞いてきた。
「……貴様らは魔剣士スパーダを知っているか？」
「スパーダ？車の名前すか？」
「そうか……いや知らないなら良い」
　彼ナツキスバルは俺とは違う世界から来たのかと1人バージルは考えていた。
「そういやバージルさんさっきから気になってたんですけど日本刀持ってますよねそれ本物すか？」
「そういえば気になってたわ！その武器はなんなの？」
「僕も気になってたよ。その武器から凄まじい魔力が溢れ出ているからね。」
「……これは父の形見だ」
　とバージルは一瞬うつむきながら言った。
「よしついに着いた」
　盗品蔵についた。さっそく開けようとするが
「合言葉は？」と聞かれた。

「合言葉か困ったぞどうすれば……」
　とスバルが考えているとバージルか突然ドアの前に立ちドア勢いよく蹴った。さすがにこれは想像していなかったらしく大柄の老年男性と金髪の少女か口を開けていた。
「フン面倒だこじ開けた方が早い」
　バージルさんって考える事が人と違うなぁと俺はしみじみ思いつつ俺たちは盗品蔵へと入っていった。
「誰だお前ら！」
「あぁーお前らさっきの!?」
「あぁさっそくだが徽章を返してもらおうか」
　とバージルはフェルトに迫る。
「やだね！欲しけりゃ力づくでとってみな！」
「あぁそうだな」
　とバージルは瞬時にフェルトの背後に回った。
「!!やっぱこいつただもんじゃねぇ……!!」
　フェルトは間一髪よけたが気を抜いていれば即座に徽章を奪い返されていただろう。
「いきなりドアを蹴り飛ばして今度は何じゃフェルトまさかお前跡をつけられていたのか？」
「いやつけられてねぇよただあいつだけはなんか気づいてたぽいけど」
「フンあんなに気配を隠すのが下手な奴などすぐにわかったぞ」
「バケモンかよこいつ！」
「確かに化け物と言われればそうかもしれんな」
　とバージルは一瞬うつむきながら言った。
　すると何者かが盗品蔵に入って来た。
「これは一体どういう事かしら？」

第3話　青コートの悪魔ｖｓ腸狩りのエルザ

「これはどういう事かしら？」
　突然女性の声がした。振り返るとそこには怪しげな雰囲気を思わせる闇を纏ったようなドレスを来た女性がその場に立っていた。
「私は徽章を持って来てとは言ったけど、本人を持って来てとは言ってなかったわよ」
「なんかやべぇってのははっきり分かるな……」
　とスバルが冷や汗をかきながら呟くとバージルが
「ほう……貴様腸狩りのエルザか」
「あら！あなた私の事知ってるのかしら？」
　何故バージルかエルザを知っていたかというと街を歩いている時にふと耳に入ったのだ。腸狩りのエルザという指名手配犯の名を聞いたからだった。
「あらあら、私も随分有名人になったものね」
「フン、そんな大層な名を持っていれば誰にだって知れ渡る」
「あなた方には悪いけどここにいる関係者は皆ーー」
「やってみろ」
　ガキィィン!!
　突如刃物と刃物がぶつかり合う音が聞こえた。
「まただ！またバージルさんが一瞬で移動した！」
　何故彼が瞬間移動できるかというと、それは彼の技の一つエアトリックという技を持っていたからだった。
「あはぁ今の一撃ゾクゾクしたわぁ！」
　エルザはそういうとすぐさま距離を取った。するとスバルが
「フェルト！誰か助けを呼んでこい！このままだと全滅してしちまう！」
「ええ!?いやでもあの兄ちゃんあいつと互角に戦ってるけど!?」
「いいから早く行け！」
　とフェルトを無理矢理外に出した。
「私達も援護するわ！」

とサテラがそういうとバージルは
「いや俺1人でいい貴様らは下がっていろ」
そういうとバージルはエアトリックを使い一気にエルザへ近づいた。それから鍔迫り合いが始まった。
バージルがエルザを殺さんとする刃をエルザが躱し、エルザがバージルの腸を切り裂こうとする刃をバージルが躱すという一連の動作が続いていた。するとバージルがエルザにこう言い放った。
「そろそろ終わりだ。貴様の相手はもう飽きた」
「もしかして私の事下に見てらっしゃる?」
「この世界に来て少しは骨のある奴がいるかと思ったが案外そうでもなかったか……」
「……あなたっ!」
するとバージルは刀身を鞘に納め
「冥土の土産にもっていくといい」

次元斬

一瞬だった。まずバージルさんが刀を鞘に納めてから今度はあの女が切り裂かれていた。
「まじかよバージルさんホントにやりやがった!」
「すごいねーまさかホントにあの子を倒すなんて」
「大丈夫!?怪我してない!?」
「一度に喋るな鬱陶しい」
とバージルが一蹴した。そんなことを言っていると
「そろそろ舞台の幕を……ってどういうことだ?もう戦いは終わって

いるじゃないか」
「嘘だ！ってホントだあの女倒してる!!」
「誰だ貴様は？」
「あぁ申し訳ない。僕の名は剣聖ラインハルト・ヴァン・アストレアだ君の名前は？」
「……バージルだ」
「そうかバージルか。ところで本当に君が腸狩りのエルザを倒したのかい？」
「あぁ本当だ」
　そんなことを話していると次元斬で切り裂かれてボロボロのはずのエルザが立ち上がりバージルの腹を切り裂こうとしていた。だが
「そんな体で何ができる」
　とバージルは嘲笑気味にエルザに蹴りを食らわせそのままエルザは広場まで吹っ飛んだ。広場まで飛ばされたエルザは
「いずれこの場にいる全員の腹を切り開いてあげる。それまでは自分の腸を可愛がっておいて？」
　そう言うとエルザは逃げてしまった。
「フン負け犬の遠吠えなど聞くに耐えんな」
　とバージルは嘲笑った。
「いやーやっぱバージルさんはすごいっすね！つーかあの技なんすか今度教えて下さいよー！あっでも一般ピーポーの俺に覚えられるかな……」
「そうやって喋っているのも良いが、その腹はどうするんだ？早く手当てしないと死ぬぞ」
　とバージルはスバルの腹に指を指した。
「はぁ？バージルさん何言ってんすか俺の腹がどうか……」
　とスバルは自分の腹を見るとそこにはボタボタと血を流し床に血だまりができていた。
「何じゃこりゃあ……」
　スバルは倒れた。
「スバルー!!」

第４話　ロズワール邸にて

バージルは夢を見ていた。
「逃げて!!バージル!!」
そこには悪魔に心臓を貫かれ絶命しようとしている母の姿が。
「母さん!!!」
「逃……げて……バージル……」
そして死んだ。守ることが出来なかった。もっと力があれば、悪魔を倒す力があれば、他を圧倒する力があれば母は守れた。
「バージル!!」
誰かが叫んだ。声の主は彼の弟のダンテ。バージルは我に返りダンテに逃げるよう促した。
「ダンテ逃げろ!!」
「でもバージルは!?」
「俺の事はいい早く逃げーー」
瞬間バージルは悪魔に貫かれた。
「バージル!!!!」
「クソッ!!」
逃げるしかなかった。逃げなければバージルの死は無駄になってしまう。ダンテは悪魔を睨みながら逃げた。
「！奴のガキが逃げるぞ早く追いかけて殺せ!!」
「ウォオオオオオオオオオオオオ!!!」
何者かの叫びが聞こえた瞬間悪魔はバラバラに切り裂かれていた。
「コイツ!!さっき殺したはずじゃあ!?」
「ウァァァァァァァァァ!!!」
バージルは叫びながら悪魔を斬り伏せていた。父スパーダから教わった剣術で。
全ての悪魔を殺し血だまりの中彼は立っていた。
彼のそばにはかつて母だった骸が。
「俺にもっと力があれば母さんを守れた。力があれば母さんを……」

バージルは血だまりの中の血をすくい髪を一気にかきあげた。
「Ｉ　ｎｅｅｄ　ｍｏｒｅ　ｐｏｗｅｒ　！」（もっと力を！）
バージルは目が覚めた。彼は今のが夢だということを自覚したのだろう。バージルは心に穴が空いていた。魔帝ムンドゥスに殺され改造されダンテに立ちはだかった。最初はバージルが有利だった。テメンニグルの時もそうだ。彼はさらなる力を得るという誓いを立て戦っていたのだ。だがダンテはその信念のもとに戦っていたバージルと互角に戦った。そして勝った。バージルはあの時のダンテの言葉を思い出す。
「俺達がスパーダの息子なら！受け継ぐのは力なんかじゃない！もっと誇り高き……彼の魂だ!!」
ダンテは力ではなくスパーダの意志を受け継いだのだ。そこに何が違ったのか。バージルは未だ理解できなかった。
（俺は間違っていたのか？今まで俺は全てを圧倒する力の為放浪して来た。だが奴は短期間で強くなった。何故だ？俺に何が欠けている？）
バージルは一人思案していた。するとドアをノックする音が聞こえた。
「バージル調子ははどう？昨日はゆっくり寝れた？」
銀髪の髪が特徴の女の子が入って来た。
「サテラか」
そういうとサテラは
「ごめんねバージル。私の名前サテラじゃないの」
「何だと？」
「ごめんって言ったじゃない！」
サテラは少し怯えるようにバージルに言った。
「違う。何故名前を偽っていた？」
「バージルは知らないの？嫉妬の魔女」
バージルは今のサテラのある単語に注目した。
「嫉妬の魔女？」
「嫉妬の魔女、銀髪のハーフエルフでこの世に災厄をもたらした最悪

の存在よ」
バージルはニヤリと不敵に笑った。
「どうやらこの世界はまだまだ捨てたものではなさそうだ」
サテラは疑問に思った。この世界?その事について聞こうとすると
「そういえば貴様の名前は?」
名前?とでもいうような顔をしていた。
「貴様の本当の名前だ貴様は魔女ではないだろう」
とバージルがエミリアにいうと
「……そうよねバージルは分かってるじゃない!」
エミリアは何故か嬉しそうに笑った。
「あっそうだったスバルの所に行くの忘れてた!ちょっと行ってくるわね!」
そういうとエミリアは客室を出た。
ーー数十分後ーー
「退屈だ……」
それもそのはずずっと客室にいても暇なだけだ。そう思いバージルは客室から出ることにした。それからバージルは廊下を歩いているが他の部屋に着く気配がまるでない。
(まさかループしているのか?)
そう考えバージルは最初に開けた扉に戻っていき再度扉を開けた。
「……何で今日は2人も入ってくるのかしら」
2人?と思いバージルは辺りを見渡すと
「あっバージルさんじゃないすか!まさかあんたも入ってくるとは思わなかったすわー」
「ナツキスバルか」
「ぐぬぬ……今日はなんて日かしら!」
そういうとバージルが
「フンあんなずっと廊下がループしていたら怪しいと思うだろう馬鹿め」
そうだぞーベア子とスバルがベア子?に言うと

「……またあれをやられたいのかしら？」
「ごめんなさいごめんなさい!!」
何かされたのだろうかスバルがさっきとは全く違う態度になった。
「お前もさっきの態度の罰よお灸を据えてやるのかしら」
スッとベアトリスがバージルに手を伸ばした。スバルは何か思い出したのだろうか何とも言えない表情になっている。
「!!なんてマナの量あなた本当に人間なのかしら？」
「……さあ何のことであろうな？」
「ぐぬぬ！今日はこれくらいにしておいてあげるのかしら！」
そういうとベアトリスは扉の前に立ち
「何をしているのよ早く来るのかしら」
ああそうかこれから屋敷の主に会いに行くのだったな。
そう思い出しバージルとスバルは食堂に向かった。
（バージルさんあれやられて何ともなかったのか？何とも無かったとしたらバージルさんホントに何もん何だ？）
スバルは1人疑問を抱いていた。
「やあ君達がエミリア様を救ってくれたバージルくんとスバルくんだぁ～ね話は聞いているぅ～よ」
バージルは変な喋り方をする奴らだなと思いながら話を聞いていた。
「そこでエミリア様を救ってくれた君達に何か褒美をあげよぉ～う何でも言ってくれたまぁ～え」
「バージルさん何でもって言ってくれたんだからやっぱりあれっすよね？」
とスバルはバージルに耳打ちをする。
「あぁそうだなこの状況で何でもと言われたらそれしかあるまい」
「じゃあせーのので言いますよ？せーの」
「俺をここで働かせてくれ！」
「俺を数日間ここに滞在させて欲しい」
「え？」
「む？」

見事に食い違った。

第5話　ロズワール邸にてその2

「俺をここで働かせくれ！」
「俺を数日間ここに滞在させて欲しい」
「え？」
「む？」
　思ってる事が同じだと思っていたはずの2人が素っ頓狂な声をあげた。バージルはただ驚いただけだが。
「ちょっとバージルさんどうゆーことっすか？普通ここは働かせてくれ！でしょ？」
　そうスバルが言うとバージルは何言ってんだコイツと言うような顔で
「馬鹿か貴様は屋敷の主が何でもと言ったんだぞもう少し欲を出せ」
　と2人は言っていたがこの屋敷の主ロズワールは
「そぉ～かスバルくんはここで働きたいのとバージルくんはこの屋敷に滞在だね承知したぁ～よ」
　ロズワールがそう確認するとスバルは渋々承諾し、バージルはああと頷いた。
「まずは文字を教えてくれこの世界の文字は全く分からん」
「言ってる事の意味が分からないわお客様」
「言ってる事の意味が分かりませんお客様」
「あっ俺もだからな！」
　ついでにと言わんばかりにスバルも言ってきた。
「だいたいこの世界ってどういうこと？」
　とラムが怪訝な表情で聞いてきた。
「俺は別の世界から来たこの世界の住人ではない。」
　それにとバージルは続けた。
「そこにいるスバルもーー」
「どうかしたの？お客様？」
「……いいや何でもない」
　と言うとスバルが食いかかってきた。

「ちょっ何で言わないんすかバージルさん!!」
バージルは少し席を外すぞと言ってスバルを連れ出した。
「……」
双子のメイドのレムがバージル達を怪訝な目で見ていた。
（……さすがに怪しむか）
バージルはその視線に気づいていた。だがそれは後にしておこうとバージルはそそくさとスバルを連れていった。
「良いかこれから貴様は異世界から来たと言わん方がいい」
バージルは真剣な表情で言った。
「な、何でですか？」
スバルが食い気味に聞いた。
「俺がこの世界の住人ではないとエミリアに言おうとした時心臓を掴まれたような気がした」
何だそれ気持ちわるっとスバルは呟いた。
「俺は自分でそれを取り払ったが、貴様は出来なさそうだしな心臓を潰されて死ぬだろう」
「し、死ぬ!?」
とスバルはひどく驚いたそれもそのはず自分の正体を言おうとした瞬間死ぬのだ。
「一応忠告はしたぞ死にたいなら言っても構わんが」
「バージルさん何者なんすかアンタ心臓掴まれたのに自分で取り払ったとか」
「そうだな一応話しておくか」
ゴクリとスバルは唾を飲み込んだ。
魔剣士スパーダ。
魔界最強の魔帝ムンドゥスの右腕的存在だった悪魔。
ムンドゥスは人間界を侵略しようと人間達と戦っていたが、人間が悪魔に勝てるはずもなく悪魔が人間界を侵略するのは時間の問題かと思われた。だがその悪魔側の魔剣士スパーダが正義に目覚め何千何万といる悪魔達を倒し魔帝ムンドゥスを封印した。そして魔剣士スパーダは人間界に降臨し1人の女性と恋に落ち2人の双子を産ん

だ。
「そしてその双子のうちの1人が俺だ」
　こんなところかとバージルが言うとスバルが
「いやいやいやいやえええ!?バージルさんそんなここと同じようなファンタジーな世界に住んでたんすか!?」
「そうだ二度も言わせるな」
「嘘でしょただでさえそれでびっくりしてんのにしかもその伝説の魔剣士の息子!?」
　スバルは未だ驚いていた。
　それからバージルは客室でラムに文字を教えてもらっていた。バージルは飲み込みがとても早かったため短期間で文字を覚えた。
「……そろそろか」
　そうバージルは1人つぶやき部屋から出た。
「おいそこの青髪のメイド」
「!?」
　いきなり声をかけられ慌てたレムは
「な、何でしょうかお客様」
「貴様が俺を殺そうとしている事は分かっている。だが貴様では勝てん」
　そうバージルが言うとレムは
「いいえ少なくともあなたは殺すつもりはありませんでした。」
　なかったか、とバージルは笑みを浮かべる。
「ではここで俺を殺すと?」
「……不本意ですが、仕方ありませんね」
「少しは楽しませてくれるのだろうな?」
　こちらの台詞ですとレムは冷たく言う。
「ならばどうする?ここでやるか?」
「いいえあなたは物分かりがよろしいようなので、ここで戦うとあたりが汚れてしまいます」
　よほど自信があるのだなと心の中で呟きああそうだなとバージルとレムは屋敷を出た。

一方その頃

「エミリアたん……もう食べられないよぉ」

見事に爆睡していた。これから壮絶な戦いがあるとは知らずに。

第6話　鬼ｖｓ悪魔

バージルとレムは屋敷の外に移動し、ある程度距離が離れていたところに立っていた。
「覚悟はいいですか？」
「私が勝てば魔女教について吐いてもらいますよ」
レムが遠回しの勝利宣言をする。
「そうか。魔女教など知らんが俺が勝てば俺を今後おとなしくすると誓え」
バージルは閻魔刀を構える。一方レムも自身の武器のモーニングスターを構え、戦闘態勢に入る。
先に先制攻撃を仕掛けたのはレムだった。だがバージルは動かない。レムは勝機と見てモーニングスターをバージルに振りかざす。だがバージルはそこにはいなく蒼い残像だけが残った。
（!?一体何処にーー）
レムはバージルを見失った。一体どうやって移動したのかと思案していると
「よそ見とは余裕だな」
バージルはエアトリックを使い上空に瞬間移動していた。
「ッ！アルヒューマ!!」
レムは巨大な氷の塊をバージルに打ち込んだ。
「！」
バージルは自身の魔力で精製した幻影剣を作り、地面に刺した。するとバージルはその幻影剣の元に瞬間移動した。
「……只者では無いと思っていましたがまさかここまでとは」
レムが少し冷や汗をかきながらそう呟く。
「貴様もその歳にしてはやるな」
「貴様はなぜ闘う？貴様の魂はなんと言っている？」
バージルが問いかける。レムは少しイラつき
「……もう死んで下さい」
レムはモーニングスターを振りかざす。バージルはそれを刀で弾

く。金属と金属がぶつかり合い、耳障りな音を出す。だがレムはニヤリと笑いモーニングスターを闇魔刀に絡ませた。
（あの人は武器を一つしか持っていない。武器を奪えばこっちの勝ちです）
バージルは闇魔刀を取られモーニングスターがもう一度バージルの方に向かってきている。だが、
「そんな戦法で俺を倒せると思っていたのか？」
バージルの手が突然光り出した。レムは驚きを隠せずにいる。
（……ベオウルフ。使うのは久しぶりだな。感は鈍っていないだろうか）
閃光装具ベオウルフ。以前バージルがテメンニグルいた時に手に入れた魔具で元々は上級悪魔だったもの。悪魔を魔具に変えるためには方法がある。一つは上級悪魔に己の強さを証明する事。２つ目は上級悪魔に勝ち心の底から勝てないと思わせる事。バージルは後者のやり方で魔具を手にした。
バージルはベオウルフでモーニングスターを打ち返した。
「……あなた本当に何者なんですか？しかもその武器、嫌な匂いがすごくします。」
「それもそうかなにせこいつは元々は悪魔だったのだからな」
「悪魔？ルグニカには魔獣はいても悪魔は……」
バージルが幻影剣を飛ばした。
「!?不意打ちとは卑怯なーー」
が、当たったのはレムではなくレムに攻撃しようとしていた異形の存在だった。
「少しは後ろを警戒しておけ」
レムは背後を振り向くと人とはかけ離れたモノが倒れていた。
（まさかこの世界にも悪魔がいるとはな）
バージルは自身の周りに円陣幻影剣を作り出し悪魔に近づいた。悪魔共は逃げようとしたが半分が消し飛んだ。
「これもあなたが呼び寄せたのですか？」
バカを言うなとバージルが一蹴する。

「こいつらは俺の世界にいた悪魔だ」
（まさか向こうからやって来たのか？）
いや、今は考えている場合ではないと思いバージルはベオウルフを構えた。目の前の悪魔共を一掃しなければならない。
「レム！貴様は右をやれ！俺は左をやる」
そうバージルは言うとレムは不服そうに
「……わかりました」
バージルはベオウルフで悪魔を一方的に蹂躙していた。
近づいてくる悪魔を殴り蹴り逃げる悪魔は空高く飛翔し、
空から蹴りを放った。一方レムも少女とは呼べないほどの
戦闘能力を有していた。モーニングスターであたりの悪魔をミンチにしていた。と言っても悪魔は死ぬと肉体が消滅してしまうが。
「そろそろ数が減って来たか……」
あらかた悪魔は片付けた。周りが静かになる。だが
「やはりこの程度の下級悪魔では貴様を殺しえなかったか逆賊スパーダの息子」
突然声が聞こえた。そこには下級悪魔とは違う雰囲気の悪魔がいた。自我があるということは上級悪魔だろう。
「親父を知っているということは貴様も同じ世界から来たのか」
「ああ、我は時空を操る能力を持っていてなその能力のおかげでな」
レムは何が何だか分からないと言わんばかりの表情で２人の会話を聞いていた。
「我はお前を許さぬ!!兄を殺した貴様の弟を!!」
「弟だとまさかダンテか？」
バージルは少し驚いたように反応した。
「兄を殺した貴様の弟に貴様の首を送ってやる!!我の兄を奪ったことを同じように後悔させてやる!!」
悪魔はバージルに憎しみをぶつけて来た、それもそのはず悪魔は兄を殺されたのだ。怒りが湧かないわけはない。
「だが今はまだその時ではない、奴が来た後に奴に兄の無念を晴らさせてもらうその時までせいぜい震えて眠るがーー」

奴？と悪魔が意味深な事を言ったのでどういう事だと聞こうとした。だが、
悪魔の体に何かが当たった。
「お話は終わりましたか？貴方には消えていただきます」
だが悪魔は大して効いていない様子だった。
「……そうか余程死にたいようだな、だが貴様は我の相手には務まらん貴様にはこいつらで十分だ」
そう悪魔が嘲ると森の中から犬が出て来た。
「！魔獣……」
「先程我を襲って来た畜生共でな、我が此奴らを返り討ちにしたら我に服従したようだ」
悪魔はそう言うとバージルとレムに
「貴様らはそこの畜生共と戯れてろ。次に会った時が貴様の最後だ、また会おう」
そう言うと悪魔は手から何か波動を撃ち込み空間を歪ませた。
「待て。貴様から聞くことはまだーー」
「……まずはこいつらを片付けるか」
あたりには魔獣と呼ばれる犬と酷似したものがそこら中にいた。
「おいレムまずはこいつらを片付けるぞ」
だがレムは返事をしない。もう一度レムに声を掛けようとすると、
「アハハハハ！アハハハハハハハハ!!」
突然レムは笑い出し、そして頭から角が生え始めた。
「魔獣！魔獣！魔獣！魔女！魔女！魔女ォ!!」
一心不乱にレム？は魔獣を殺し続けた。その乱暴な力で滅多打ちに屠る姿はまるで、
「鬼……」
だがレムは気づいていなかった背後から襲いかかろうとする魔獣に。
「いかんこのままではやられてしまうな」
バージルは襲いかかってくる魔獣を閻魔刀で斬り伏せながらレムの元へ向かう。だが間に合わない。

「あぶねぇー!!!」
突然スバルがレムにぶつかりレムを吹き飛ばす。
「グァァァァァァ!!」
魔獣はレムからスバルに変わっても御構い無しに噛み続けた。
「Ｓｃｕｍ」（クズが）
バージルはスバルに噛み付いていた魔獣だけ斬り伏せた。
（……あそこにいる奴がボスか）
バージルは一匹だけこちらに攻撃せずじっと見ていた魔獣に注目していた。
するとその魔獣がみるみる内に大きくなりさっきの何倍にも大きくなった。
「Ｈｕｈでかくなっただけで俺に勝てると思っているのか？」
「Ｃｕｔ　ｏｆｆ！」（斬る！）
魔獣はバージルに噛みつこうと近づいたがいつの間にか斬られていた。魔獣は気が動転してしまったせいで冷静な判断が出来なかった。それからは一方的な戦い、で斬られ続けた。魔獣はバージルに爪を振りかざそうとしたがその手も斬られ、噛みつこうとすれば斬られ文字通り手も足も出ない状態だった。
「これで仕舞いだ」
斬り終わったバージルは静かに閻魔刀を鞘に納める。キンッという澄んだ音が聞こえた。
「凄い……あの量の魔獣をたった一人で……」
「どうしたの!?大丈夫スバル!?」
外の音が気になって来たエミリアはスバルの傷ついた体に酷く驚いた。
「私はなんということを……」
（なぜ殺そうとした私を助けてくれたのですか？）
レムは分からなかった。何故殺されそうになっていたスバルがレムを助けたのか。
「ていうかなんで３人とも外に出てるの？」
スバルを介抱しているエミリアが聞いてきた。

（私はメイド失格ですね……）
「私がーー」
「俺がレムに声をかけた、近くに魔獣がいるから狩らないかと。だがそれを聞いていたソイツが一緒にやると言い出してな困ったものだ」
バージルはレムの声をかき消すようにそう言った。
レムは少しだけ驚いている。
「バージルさん!!」
レムは説得するように言うだが、
「さあな俺には貴様が何を言いたいのかまるで分からん」
「ではバージルさんとスバル君に言います。ごめんなさい」
「フン……」
バージルはいかにも気に食わんという表情で鼻で笑った。
「あのさぁ……2人で盛り上がるのもいいけど少しはこっちの心配もしてくれよな……」
「あれは貴様がいきなり飛び出したからだろう」
「ええ!?怪我人なんだから少しは心配してくださいよ!!」
「スバル君大丈夫ですか？何か私に出来ることはありますか？」
「おおうお前は心配してくれんのな……」
バージルはため息を吐いた。だが表情はどこか少し、笑っていた。

第7話　バージル、王都へ行く

俺は今悩んでいる。何を悩んでいるかというと原因は奴、ナツキスバルだ。
「ーーそして最後にビクトリー！」
村人と一緒に何かをしているナツキスバルを見つめ、考えていた。
（あの動きはなんだ？あんな動き見た事がないぞ）
バージルは闇魔刀という日本刀と酷似した物を持っているが、日本には行った事がなかった。
（……後で聞いておこう）
「えぇ!?バージルさんラジオ体操知らないんすか!?」
「当たり前だろう俺は日本になど行った事がない」
バージルはきっぱりと言った。
「じゃあその日本刀はなんすか？」
スバルはバージルが持っている闇魔刀に指を指した。
「これは魔界で作られた親父の形見だ」
「あそっかバージルさんのお父さんって悪魔なんですもんね」
スバルは思い出したとでもいうように納得する。
「えっ？バージルって人間じゃないの？」
エミリアは初耳だったせいか酷く驚く。
「ああそうか貴様には言ってなかったな。俺は人間と悪魔の間に生まれた」
「悪魔の!?じゃああなたもハーフなの？」
あなたも？とバージルは聞き返す。
「そうか貴様はハーフエルフだったか」
「ハーフエルフが魔女と関係あろうが俺の知った事では無いが、半人半魔で悪魔に狙われた事は数え切れないほどあったな」
バージルは鼻で笑いながら呟く。
「バージルは辛くなかったの？自分の生まれだけで命を狙われて」
エミリアが不安そうに聞いた。
「フン、襲って来る奴は全員皆殺しにしていたからな。悪魔だろうが

人間だろうが」
スバルが短気な人だなと小さく呟く。
「……貴様もその一人にしてやってもいいが？」
「なんでも無いですごめんなさい」
が、バージルの耳には届いていたようだ。
屋敷にたどり着いた三人は竜車の前にいる一人の老紳士に気づいた。
「おかえりなさいませ。ただいまお屋敷の前を失礼しております」
その老紳士はお手本とも呼べる礼をしながら言った。
ーーロズワール邸屋敷内ーー
「王都から使者の方がお見えになっています。ロズワール様が応対ないさっていますがエミリア様もご同席ください」
「使者って？」
「王選に関しての事かと」
途端エミリアの顔つきが変わった。
「よし！流石に事が事だけにバカやらねぇよつにしねぇと」
「貴様は黙っていた方が良いかもしれんな」
バージルは腕を組みながら言った。
「ごめんねスバル？大事なお話なの」
エミリアも少しバージルに同調しながら言った。
スバルはうなだれながら外を見るとさっきの老紳士が竜車の整備をしていた。
「ずっとおもてにいるのも退屈しませんか？」
スバルはニコニコと先程の老紳士に茶を入れたトレイを持ちながらそう言った。
「良い味です。かなり奮発されたものだと思いますが？」
「ええバレたら桃色の髪のメイドがマジギレするくらい」
「それでこのような撒き餌を餌にこの老骨に何をお求めですかな？」
スバルが聞こうとしようとしていたのはとっくに見破られていたようだ。
「今日のの訪問の理由が知りたいんですさわりだけでも結構ですの

で」
「あなたが屋敷のどのような立場にいるのかわからない私には迂闊なことを口にすることはできませんな、ご理解を」
そう言われるとスバルはガクリと肩を落とす。ですがと老紳士は続けた。
「あなたがエミリア様と親しげな中なのは分かりました」
「俺とエミリアたんがただならぬ関係に見えました～⁉？」
スバルがそう嬉しそうに言うが老紳士は、
「たん？」
と分からない単語が出てきて混乱していた。だが老紳士は神妙な顔をしながら呟いた。
「険しい道を行きますな。相手は次期国王となるかもしれない相手ですぞ？」
「現状は超可愛い女の子と冴えない使用人ってだけです」
スバルはそう返した。相変わらず軽い反応だ。
「少しは危機感を抱いたらどうだ？」
いつの間にかいたバージルがそうスバルに言った。おそらく彼も暇だったのだろう。
「バージルさん暇だったんすか？」
「相変わらず貴様は軽口ばかり叩くな。間違ってはいないが」
バージルはため息とともに呟いた。
「御者さんは奥さんは世界一可愛い！そう思って結婚したりしなかったんですか？」
老紳士は少し困ったような顔をしながら、
「確かに貴方の言う通りだ。妻は世界一美しいと思っておりました」
彼が話を続けようとすると
「ただいまヴィル爺！外で待たせちゃってごめんね退屈だったでしょ？」
現れたのは猫の耳のようなものが付いている女？だった。
「いえいえこちらが老骨の話し相手になってくださいましたので」
「はみょん？」

おまけに奇妙な喋り方をする。そしてなにをするかと思えばスバルの体を隅々と見始めた。
「にゃるほど～君がエミリア様の言っていた男の子にゃのね～」
（変な喋り方をする奴だな…）
「それで君がバージル君にゃんだね？」
「……ああそうだ」
バージルは少し引き気味に答える。
「それじゃあ二人とも王都で会おうね♪」
「あのね、遊びに行くわけじゃないの！大事な呼び出しがあってーー」
「大事な事なら尚更だ！俺はエミリアたんの助けになりてぇんだ！」
スバルはエミリアに王選について行きたいとエミリアと口論していた。するとレムが
「王都ではスバルくんがお世話になった方々もいらっしゃるみたいですしこの機会にお礼に行くのも良いかと」
レムがすかさずフォローした。
「ナイスアシストレム！」
レムはスバルに頭を撫でられると嬉しそうに微笑んだ。
「そうそう！王都には世話になった奴らがいる。顔見せて安心させてやらねぇと！」
「いいんじゃないかい？王選云々とは別のお話で、スバルくんには治療目的ってぇ～事で」
治療目的？とスバルは疑問を投げかける。
「魔獣との戦いで枯渇したゲートの治療って事で、スバルくんはさっきの使者には会ったかな？」
「あの猫耳ぶりっ子か？」
「あの子はこの国で最も優秀な水魔法、治癒魔法の使い手だぁ～よ。癖のある子だから協力を取り付けるにはエミリア様も随分苦労したからねぇ～え」
「ちょっと！」
「マジで!?エミリアたん俺のこと心配してくれたの!?」
「違うの！だってスバルの体が治らないのは私のせいでもあるもん！

だからこれは恩返しっていうか損失に対する正当な補填なの！」
　分かりやすい言い訳であった。
「ヴィル爺があの子と話すなんてなんだか意外だったかなぁ人と話すより剣でぶった斬っちゃう方が好きなのに」
「酷い言われようですなぁ」
　話しているのは先程竜車を整備していた老紳士と使者だった。
「少しばかりおの少年の目が気になっただけです。あの目は何度か死域に入った者の目です」
「何より気になったのはあの青いコートを着た彼です。あんなに冷たい目をした者は見た事がありません」
　彼は一呼吸置き
「そして恐らく、彼は私より強い」
　静かにそう言い放った。
「……まさか剣鬼、ヴィルヘルム・ヴァン・アストレアがそこまで言うなんてねぇ。今度会えたらもう一度ちゃんと見てみようかな」
　ーー王都ーー
「……何故俺もここにいる」
「いやー出来ればバージルさんも来てくれれば心強い味方になってくれると思って」
「俺は貴様の用心棒ではない」
「まぁ来ちゃったもんはしょうがないですし気にしなくていいじゃないですか！」
「それよりも何だその有様は」
　バージルは疑問を投げかけた。理由はエミリアとスバルが手をつないでいたからだった。
「エミリアたん？やっぱこれやめね？これかなり恥ずかしいんだけど…」
「絶対にだーめ！スバルの事だからまたすぐに変な事するに決まってる！」
　それもそうだなとバージルも認めていた。
　何故こんなに警戒されているかというとまずスバルが竜車の窓か

ら上半身を出していた。そのはずみで竜車から落ちそうになった。
「あん時はすんげー反省してるけど扱いがガキすぎるってこれ」
「村でデートした時はあんなに繋ぎたがってたのに？」
「あん時は心と体の準備は出来てたけど今は出来てないの、手汗すごいの！」
「いい加減イチャつくのはやめてくれよ客が寄り付かなくなんだろうが」
　声の主はりんごを売っているようには見えないガタイの持ち主であった。
「せっかく約束を果たそうって来たのにつれねぇな」
「まぁ無一文じゃ無くなってちゃんと買いに来たってのはありがてぇがな」
　すると店主は袋をスバルに押し付け
「ほらよ約束のリンガだ持ってけ」
「次はフェルトとロム爺か」
　スバルはリンガの入った袋を持ちながらそう呟いた。ちなみにバージルは別行動をすると言ってどこかに行ってしまった。
「しっかしバージルさんはどこ行ったんだろうなぁーなんか調べたい事があるからってフラーとどこかに行ったけど」
「それならバージルが言ってた悪魔？の事じゃない？悪魔の事になるとバージルすごーく顔が変わったりしてたし」
「確かにな、バージルさん今まで何して来たんだろう」
　まさか父の、スパーダの力を手に入れる為に悪魔を地上に解き放とうとしてたとは思わないだろう。
　一方バージルはあの上級悪魔についての情報を得る為一人王都を探索していた。
「やはり奴は神出鬼没か……奴を倒し、魔具に変えれば元の世界に帰れるかもしれない。だがまずは奴を探さなければ」
　バージルは怪しい箇所を見て回ったがやはり何もいなかった。
（奴はどんな意味で言っていたんだ？）
　悪魔が去る前に言い残した言葉

「だが今はまだその時ではない奴が来た時に奴に我の兄の無念を晴らさせてもらう」
奴とは誰のことなのだろうかと、バージルが歩いていると
「ねぇホントに知らないの？」
「だから知らねぇよ！そんなもん見た事も聞いた事もねぇよ！」
何やら女の声と男の声が聞こえた。女は落ち着いて話しているが、男の方は何回も聞かれているのであろうイラつきながら声を荒げていた。
「じゃあ最後に聞くけどこんな悪魔は見た事ない？青いコートを着たすんごい冷たい目をしてて性格がひねくれてそうな悪魔とか」
女はバージルの方に振り向いた。
「あら？やっぱりいるじゃない」
「……何故貴様がここに？」
バージルの前に居たのは巨大な銃剣を持った女デビルハンターレディだった。

第8話　集まりしデビルハンター

「……なぜ貴様がここに？」
　そこに居たのはかつてテメンニグルを起動させようとしたアーカムの娘だった。
「それはこっちのセリフよ。なんであんた生きてんのよ」
「質問を質問で返すな。なぜ貴様がここに？」
「ハァ、私達はこの世界に逃げてきた悪魔を倒すために来たのよ。それでなんであんたはここにいんの？」
「突然ここに飛ばされた。本当なら俺は地獄に行くはずだった。だがなぜかここに居た。それだけだ」
　バージルは淡々と質問に応じた。バージルは今レディが言っていた事に疑問を生じた。
「今私達と言っていたがまだ他にいるのか？」
「ええ……私とダンテ、とあと……トリッシュっていう私と同じ女デビルハンターがいるわ」
「それで、悪魔はどこにいるか分かったか？」
「いえ、まだ分かって無いわ」
　そうかとバージルが答えるがレディはただ、と呟いた。
「あの悪魔がある組織と組んでる、ていう事が分かったわ」
「組織だと？」
「ええ、魔女教っていう宗教団体よ。ただ、その宗教団体は、まあいわば犯罪者集団ね」
「魔に身を堕とした集団というわけか」
「そのただでさえヤバイヤツらとあの悪魔が手を組んでるのよ。そいつは時空間を操るから私達の世界から悪魔を召喚しているのよ」
「厄介だな」
　でもとレディは続けた。
「魔女教が命を狙っている対象は分かったわ」
「誰だ？」
「エミリアっていうハーフエルフだそうよ」

「なんだと？」
「あら？その子知ってるの？」
「ああ、今俺が滞在している屋敷の世話になっている奴だ。そいつらがエミリアを狙っているのか？」
「ええ、そういう事。だからそのこの側にいて奴らが来たら迎え撃てば良いって話。それとこの事はこの国のお偉いさん方にも伝えたから私達は存分に暴れられるわけね」
「そうか、分かった」
「……アンタそんなんだったっけ？昔のアンタってそんな事知らんとか言って一蹴してたと思うけど」
「自分じゃ分からんが、そんなに変わったか？」
「そりゃもう。とても変わったわよ。昔より格段にこっちの方が良いわ」
「それじゃ行きましょうか」
　バージルは全く見当が付かなかった。それを見たレディが
「どこって王城よ。あなたも来なさいよ味方がいればいるほど心強いもの」
「……味方か」
「？ほら早く行くわよ。ダンテも待ってるから」
「ダンテもだと？そういえば奴も居たな」
「……アンタ達ホント仲悪いわね」
　レディはため息混じりに呟いた。
　王城に着いた2人は守衛に訳を話し王城に入る事を許された。
「来たぞ！でびるはんたー？とやらが」
「もう1人は誰だ？あんな奴いたか？」
　周りの人間は次々とバージルの噂を立てる。
「これはなんの集まりだ？まさか物珍しさに集められた訳ではあるまい？」
　バージルは脅すように言い放った。するとどうだろうか周りの人間は嘘みたいに静かになった。
「確かにそうですな。貴方の言う通りです。では始めましょうか」

バージルは辺りの様子を見る。前には5人の少女達が立っていた。
「あれはエミリアに……む？スバルもいるのか？奴は来るなと言われたはずだが」
バージルが王城の様子を観察していると
「よぉまさかアンタが生きてるとは思わなかったぜ。感動の再会といったところか？」
「その冗談は笑えんな」
バージルはかつて袂をわかった血の繋がった弟、ダンテと再会した。
「ああそうだった忘れてたぜ。こいつを紹介しとかなきゃな。トリッシュ！」
現れたのは最愛の母の生き写しのような女性だった。
「……母さん!?」
「いいえ、違うわ。他人の空似よ」
だが見た目のそれはバージルの母そのものだった。
「まぁ、そういう事だ。ほらなんか言ってるぞあいつ」
「む？」
ダンテが指をさした方へ視線を向けると
「ふざけてんじゃねぇ!!」
何処からか怒声が聞こえた。
「あれは……スバルか？」
「なんだ知ってんのか？」
ダンテが特に興味無さそうに聞いてくる。
「ああ俺と同じこの世界に来た者だ」
途端ダンテが興味深そうに聞いて来た。
「おいおいそれって異世界転生って奴か？面白そうな奴だな！」
ダンテは基本己の衝動に駆られて動く。テメンニグルに来た時もバージルが気に入らないというだけで入って来た。
「お前はいつもと同じだな」
「？」
「つーか見ろよ今度はなんか騎士団ぽい奴に文句言ってんぞ？」

「見苦しいな」
　バージルはハァとため息を吐く。
「なんかあの子連れ出されたけど大丈夫なの？」
「まぁ終わった時に行ってやればいいんじゃねぇか？」
「何故俺が行く必要がある」
「お前の方が俺達よりあいつの事分かってんだろ？」
「……ああそうだな」
　レディがダンテの側に近寄り耳打ちして来た。
「やっぱり彼変わったわよね？」
「ああ。前は邪魔する者は全部斬る！みたいな感じだったのにな」
「……いや、変わったっつーより戻ったと言った方が正しいか」
「？」
　この間バージル達はかつての弟と再会し、思い出話に花を咲かせていたがバージル達は王城でスバルが一悶着起こしていたのを知らなかった。
「聞いた？あの黒髪の子騎士団の1人と決闘するらしいわよ」
「黒髪ってさっき暴れてた奴か？別に気にしなくてもいいんじゃねぇか？自分から始めたんだしよ」
　ダンテはそう突き放すがバージルは悩んでいた。
「いや、このまま無視してもいいが少し気になることがあってな」
「何だそりゃ？」
「これはあくまで俺の推測だが、奴と一緒にいる時俺をこの世界に連れて来た奴と同じ魔力を感じた」
「つまりあいつはお前を連れて来た奴と何か関係があると？」
「おそらくだが」
「じゃあああれ止めねぇとやばいんじゃないか？」
　バージルは窓から闘技場を見下ろした。するとどうだろう。なんとスバルはユリウスという騎士にボコボコにされていた。
「ここからだと遅いか……」
　バージルは窓を開け、身を乗り出した。
「おいバージル！チッあいつ行っちまった」

「あんなとこはそっくりなのね。貴方のお兄さん」
「似てねぇよ」
ダンテは誤解されないようにはっきり言った。バージルは急降下した。出来るだけ闘技場に近づけるように。
そして闘技場の中央に落ちた。騎士達は驚き、慄いているがバージルは気にせず言った。
「もうそれくらいにしてやったらどうだ。死ぬぞ」
そこには傷だらけのスバルと無傷の騎士、ユリウスが最後の一撃を与えようとしていた。
「邪魔をしないでもらえないか？彼は我々騎士団の誇りを侮辱した。むしろ殺されない事に感謝してほしいものだ」
「貴様の魂胆は分かっている、だがやり過ぎだ」
バージルに気がついたスバルが
「バージルさん!!これは俺の決闘だ！だからあんたは手出ししないでくれ!!」
「ハンデをもらってそのザマのお前が何を言っている。お前は治療してもらえ」
「でもバージルさーー」
「スバル……二度は言わん。去れ」
バージルは冷たく言い放った。
スバルは諦めたのか闘技場から出て行った。
「さて……邪魔者も消えた事だ、俺と戦え。騎士団の力を見せてもらおうか」
「理由もないのに決闘は出来ない」
「仮に貴様らが束でかかって来ても全員殺せるぞ？」
「先程貴様らを見ていたが雑魚ばかりだったな。こんな奴らでは国は任せられん。なんだったら俺がやってやろうか？」
バージルは嘲笑気味に言い放った。騎士達は当然憤り怒るはずだった。だがバージルの言っている事は現実味を帯びていた。圧倒的強者しか纏うことを許されないオーラ、それがバージルにはあった。

「……君は騎士団を侮辱しただけでは飽き足らず騎士道までも侮辱した」
ユリウスは再び木剣を握りしめた。
「まさか木剣で戦う気ではあるまいな？」
バージルは木剣を砕き、闇魔刀を鞘から抜いた。
「真剣で来い……貴様の剣は飾りではないだろう？」
「ここまで侮辱されたのは初めてだ……良いだろう。君とは真剣でやらせてもらう」
バージルは闇魔刀を構え、戦闘の態勢に入った。
「あれは……バージル!?ダメだユリウス!!君では勝てない!!」
声を上げたのは剣聖ラインハルトだった。
「剣聖……奴も手応えがありそうだな」
バージルはユリウスではなくラインハルトを見ていた。
「余所見か……随分舐められたものだな！」
ユリウスは先制攻撃を仕掛けた。対してバージルは構えを解き、そして
「ふむ……なるほど筋はいいようだ。だが……」
バージルは片手で真剣白刃取りをした。抜群の神経を持っていなければここまでの芸当はできない。
「さて今度は俺の番だな」
バージルは闇魔刀を再び構え、そして
「Ｓｏ　ｓｌｏｗ（遅すぎる）」
「何!?」
振りかざした。ユリウスはそれをギリギリで受け止めた。
（重い……!!どれほどの鍛錬をすればこのような力が……!!）
「Ｗｈａｔ　ｕｐ？（どうした？）」
「くっ……！なめるな!!」
ユリウスはなんとか闇魔刀を弾き返した。
「ほう……やるな。では俺も少し本気を見せてやろうか」
「やめとけバージル。これ以上あんたが本気出したらそいつ死ぬぞ。

つーかそれにお前の目的はそんな事じゃないだろ？」
「フン……まぁ良いだろう。では帰るか」
バージルは背を向け闘技場の出口へと歩き出した。
「君は……本当に優しいね」
ユリウスは何か納得した表情でバージルに言った。
「……さぁなんの事だろうな」
バージルは鼻で笑いながら去っていった。
「さて、どうする？あの悪魔はどこにいるかわかんねぇしやっぱりあのお嬢ちゃんのとこで待ち伏せするか？」
バージル達は王都の中を歩きながら話し合っていた。
「ああその方が確実かもしれん。あの悪魔も俺があそこにいるのを知っているからな」
「じゃあ屋敷にお邪魔するとするか」
一行はロズワール邸へと向かった。
「お客様？お連れがいるとは聞いてませんが？」
「ああ、三人とも俺と同じ世界から来た奴らでな、事情があるんだ。泊まらせてはくれまいか？」
「事情とは？」
「ああ実はな……」
バージルは今までの経緯を全て話した。
「まさか本当に別の世界から来たなんて思いもしなかったわ」
「それに本当なの？魔女教がエミリア様を襲おうって話は」
「ああそうだ」
ラムはそれを聞くと表情が変わった。
「魔女教……」
「何があったか聞くまい。ただエミリアが危ないとだけ伝えておく」
「まっ心配すんな。悪魔退治は専門分野なんだ。黙って見とけよ」
バージル達は村人達に避難を促し、いつでも戦えるように備えた。
そして彼らは来た。
「おやぁ？貴方達は何者ですか？」
「貴様らが魔女教か」

「いかにも私が魔女教大罪司教怠惰担当ペテルギウス・ロマネコンティ……デスッ!!」
「随分なげぇ名前だな」
「おや？おやおや？貴方……素晴らしいィィィ!!!私は貴方のような濃厚な魔女の香りを持った者は見た事がないのですゥゥゥ!!」
「バージルお前臭いってよハハハハ！」
「貴様終わったら覚えてろ」
　バージルの頭に青筋が浮かび上がった。
「まぁ、冗談はこれくらいにしておいて……お前ら魔女教っつー組織なんだろ？」
「その通りなのです!!私達は日々魔女に信仰をーー」
「ああー分かった分かった。俺は普通は人間は殺さねぇが魔に身を落とした奴は別だ。ぶった斬らせてもらうぜ」
「なんと!!貴方達は私達勤勉なる魔女教を潰すおつもりなのですか!?なんとも酷い事ォォォォォォ!!実に実に実にィィィィィィ……脳が震える」
「んじゃあやるか。魔女狩りならぬ魔女教狩りをよぉ！」
　デビルハンターｖｓ魔女教との戦いが今、始まる。